

○日本で栽培され始めた ツバキ 属2種 (津山尙) Takasi TUYAMA: Two camellia species of recent introduction

1. *Camellia maliflora* Lindley この種は附図で見られるような小型の八重咲、薄いローズ色の花をつける可愛らしいツバキ属である。トウツバキを英国に輸入した Captain Rawes が中国のどこからかこれを同国に輸入し、最初に *Camellia sasanqua*  $\beta$  Sims (in Bot. Mag. t, 2080, 1819) として記載された。しかしその後長く *Camellia rosaeiflora flore pleno* として同国の園芸界で知られていたため、一部では *C. rosaeiflora* と誤称されていることがあるが、後者は一重咲で、同様に中国から英国に輸入されたものであるが、植物学的には全く異った種である。*C. maliflora* は野生は知られていないし、また一重咲のものも知られていない。しかし、現在の所、どの野生種ともこれを適確に結びつけることができず、Dr. Sealy もこれを一つの独立種としてあつかっている。ツバキ属の分類には苞から萼片への形態の変化、それらの花梗上での配置が重要な特長のひとつとされるが、この *C. maliflora* では、苞から萼片まで連続的にだんだん大形となり、これが、非常に短い花梗の上に密接に重なり合っている。更に興味のあることに、この種では花が終ると、花梗の基部から離れて花全体が一かたまりとなって落下することである。枝・葉、花の他の部分の特長は sect. *Theopsis* に似ているが、苞・萼片の様子は sect. *Camellia* (ツバキ、トウツバキなどを含む) に似ている。そのためこの2つの節に属する種の間の雑種ではないかとも考えられているが、今の所定説はない。花が八重化していて、雌雄蕊の本来の性質を見きわめることができないことも、交配親の推定を困難にしている。別説によると sect. *Paracamellia* に属するサザンカ

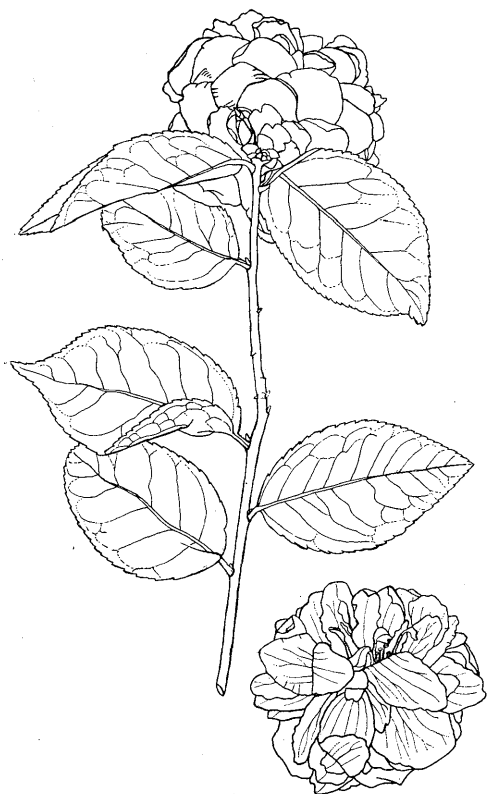


Fig. 1 *Camellia maliflora*

埼玉県, 安行, 吉沢氏宅にて昨年開花のものを押葉から描く  $\times 1$ ,

立種としてあつかっている。ツバキ属の分類には苞から萼片への形態の変化、それらの花梗上での配置が重要な特長のひとつとされるが、この *C. maliflora* では、苞から萼片まで連続的にだんだん大形となり、これが、非常に短い花梗の上に密接に重なり合っている。更に興味のあることに、この種では花が終ると、花梗の基部から離れて花全体が一かたまりとなって落下することである。枝・葉、花の他の部分の特長は sect. *Theopsis* に似ているが、苞・萼片の様子は sect. *Camellia* (ツバキ、トウツバキなどを含む) に似ている。そのためこの2つの節に属する種の間の雑種ではないかとも考えられているが、今の所定説はない。花が八重化していて、雌雄蕊の本来の性質を見きわめることができないことも、交配親の推定を困難にしている。別説によると sect. *Paracamellia* に属するサザンカ

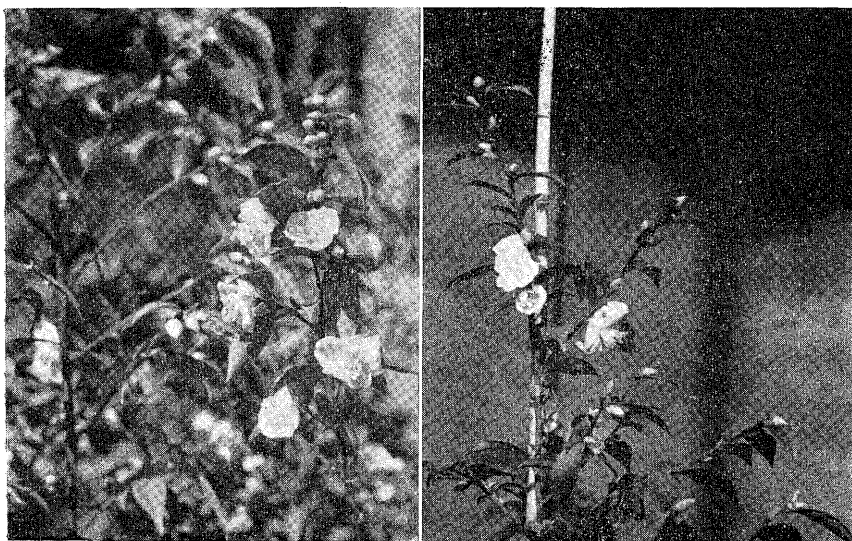


Fig. 2 *Camellia fraterna*

左. 埼玉県, 安行, 吉沢氏宅 右. お茶の水女子大学にて今春開花のもの  $\times 1/8$



Fig. 3 *Camellia fraterna*

埼玉県, 安行, 吉沢氏宅

と sect. *Theopsis* の *C. dubia* Sealy の雑種ではないかと想像されている (Dr. Sealy) が、実証はされていない。

日本で今栽培されている *C. maliflora* は米国でツバキの栽培に成功して *Camellia King* と称せられている清野主氏が、帰国の時に持ち帰ったものが元である。アメリカの椿の書物の一部では花の色を “white shaded pink in outerparts” (Dr. H. H. Hume) としているものもある。Dr. Sealy は “blush rose” としているから、小生が見ているのと大体同様である。栽培条件で色が多少変わるのかも知れない。

*C. maliflora* は欧州への古い輸入に関らず、欧州でも、その他の国でもあまり栽培されていない。どちらかというと古典的な花卉である。葉質はサザンカよりやや薄く、葉身の幅は広く、鋸歯はより目立つ。附図には省略したが、葉の中肋上部、葉柄、若い枝には極く短い毛が密生している。英国では樹高が 2.5m にもなるという。ツバキより寒さに弱い。図は埼玉県安行、吉沢時雄氏のピニール・ハウスで昨年春咲いたものの押葉から描いた。花中に少数の雄蕊があるが、多くはペタロイドに変形している。花粉親とした交配は未だ成功していない。和名はテマリ (手鞠) ツバキとしたい。

2. *Camellia fraterna* Hance 中国大陸西部、福建、江蘇、浙江、安徽、江西の地方に野生する sect. *Theopsis* の一種である。油茶 (*Camellia oleifera* Abel) と共に中国においては最も北部まで分布しているツバキ属である。枝葉はサザンカよりも著しく繊弱で、少し大きくなると枝先が垂下気味になり、各枝の葉腋ごとに白色一重の小形花を開き、非常に多花性である。葉、枝には軟かく且つ長い毛を密生する。花卉は満開になると外方に反転する。5 個の花弁は大小不揃で、外方の花弁の外側には時に薄いピンクの色がさす。やや弱い芳香がある。最初の植物学的標本は楊子江の河口外にある舟山列島で 1701 年 James Cunningham によって採集された。生植物は 1948 年米国農林省で発芽したものを配布したのが初めてである。その頃、米国と中国との友好関係がよかったので、古くから英国に輸入されていた種類以外のものが、このように米国に輸入できたのであった。日本では清野氏が持帰ったものの他に、米国のツバキ業者 Nuccio 商会からも輸入された由で、接木による繁殖は容易で、この頃大分方々で見かけはじめた。寒さにはツバキより弱い。写真および図は本年お茶の水女子大学の温室で開花したものによる。この種の多花性を利用しようと色々の種間雑種が米国で試みられている。その一つは Sawadii type で、ツバキ品種と本種との交配によったものである。Sawadii とは米国でツバキを栽培している沢田幸作氏によったもので、同氏が育成したのがはじめてである。米国農務省、園芸研究部門では色々のツバキ属の種間雑種を育成しているが、*C. fraterna* × *C. reticulata* (トウツバキの一重のもの)、*C. fraterna* × *C. lutchuensis* (ヒメサザンカ) も作出した由である。*C. fraterna* の和名はシラハト (白鳩) ツバキとしたい。

(お茶の水女子大学生物学教室)